

【第79話】きかいのなかになまみがひとり

入学式が終わった後、生徒達はそれぞれのクラスでホームルームを受けることになっている。特別クラスの陵たちも例外ではなく、ヒューマノイド専用棟にある特二クラスの教室へと向かった。

清陵高校には特別クラスは二つある。ひとつは成績優秀者を集めた特一クラスで、こちらは男女混成のクラスで学年別に存在する。もうひとつがヒューマノイドの生徒を集めたこの特二クラスで一般の生徒や教員は入れない特別棟に存在し、全学年合同クラスとなっている。ヒューマノイドについて知らない生徒や教員は、特二クラスのことをお金持ちの御嬢様と生徒会執行部員専用のクラスだと思っているようだ。

クラスの席順は出席番号順だった。陵は、ぼんやりと左隣りの窓側に居る結衣と洋子を眺めていた。イチノセ、オイカワ、オオツカ

なので必然的にこの並びになるのだ。ちなみに陵の右隣はカタギリ、キノシタと続くので、仕組みられたように陵は生徒会執行部メンバーに挟まれて中央という配置になってしまった。

教壇に立っているのは外国語の教師だ。どうやらこの教師がクラス担任らしい。清陵高校で授業として受けられる外国語は全て話せるようだ。まずは自己紹介といって自分のことを手短かに紹介した教師を陵はちらりと見やった。ソニア・ショキトボロと名乗った担任教師は九国語を操る語学の教師だけあってこの国の言葉にも精通しているようだ。白すぎる肌に青い瞳、という外見でなければ、外国人とは思われないほど流暢に喋っている。

ソニアが自己紹介に続けて、このクラスの特色について話し始める。陵は窓に目を戻してそっとため息を吐いた。このクラスに所属する生徒の数は二十七人で、その内訳は一年生が十四人、二年生が六人、そして三年生が七人になっている。共通点は、陵を除いた全

員がヒューマノイドであること。そして、裏生徒会に所属していない事だ。

一年生が多いのはヒューマノイドの普及に従い、学年が下なほどヒューマノイド生徒の割合が増えたからだ。それにも関わらず二年生が三年生よりも少ないのは、裏生徒会に移った菖蒲を含めた執行部員五名のうち四名が二年生だったからだ。彼女たちは裏生徒会執行部員専用の裏特別クラスに移ることになった。実態としては、追い出されたといった方が近い。裏特別クラスは地下施設の中でも使っていない場所を割り当ててある。また、担任教師は裏生徒会の責任で自力で探すことになっている。その辺りの話を陵は洋子から直接聞いた。

ぼんやりと窓の外から空を見つめて陵はまたため息を吐いた。さっき結衣に言われたことが引っかかっている。蘭がこの学校の教師になると聞いた時にはとても驚いた。それに自分に何も言ってくれなかったことにもむかつく。でも他のことは別に何とも思わない。

そのつもりだったのに、結衣と色々と話しているうちに何だか妙な気分になったのだ。

何でだろ、俺。別に蘭兄のことなんてどうでもいいのに。肘杖をついて窓の外を見つめながら陵はまたため息を吐いた。

蘭兄、ヒューマノイドが好きなのかな。心の中で呟いて陵はふと教室の前に目を戻した。そこで何故かソニアと目が合う。それにいつの間にか教室にいるクラスメイトは陵に注目していた。

「なに？」

「大塚綾さんは、この、特二組では初めての人間の生徒になります。彼女はヒューマノイド工学の天才で仁科研究所の博士課程に在籍してらっしゃるのです」

ソニアがにっこりと笑う。陵は訝りを覚えて首を傾げ、まじまじとソニアを見た。

「いや、天才とかじゃないし」

「謙遜なさる必要はないです」

ソニアがまたにっこりと笑う。納得出来ないものを感じつつも陵は唇を引き結んで黙り込んだ。何となくこれ以上言い返すと面倒なことになりそうだ。

陵が黙ったことでソニアは話を続け始めた。

「大塚さんがこのクラスに在籍しているのは、クラスのみなさんにトラブルが発生した時に専任修理技師として対処するためです。大塚さんは最上級の修理技師資格を持っています。ドクター仁科に墨で塗られているので安心して下さい」

「へ？」

墨で塗られているとはなんだろうと考えて、お墨付きと言おうとして間違えたのだろうと納得した。が、専任修理技師の話は聞いてない。そう言おうとしたら、隣に座る結衣に袖を掴まれ、はっと気付いた。聞いてなか

ったとしても、これで生身の陵がこのクラスにいる理由は通る。それに、ヒューマノイドの研究を行うにあたって、実際にさまざまなヒューマノイドの点検や修理の経験を積むのはプラスになるだろう。そう考えて陵は開きかけていた口を閉じた。

このクラスの体育の授業はダミーであること。さらに身体測定とそれにもなう健康診断は行われなないことなどをソニアが説明する。さらにソニアの説明は続いたが、退屈になってきた陵は、その話を右から左へと聞き流した。

ソニアの話が終わった時、ちょうどホームルーム終了を報せるチャイムが鳴った。陵は席に備え付けられた学習用タブレット端末からメモリカードを抜き、それを納めたケースをポケットにしまい込んだ。

「あっやちゃん。何、ブルーになってるのかな？ あの日？」

生身だからねえ。洋子が弾んだ声で言いながら近付いてくる。陵は別に、と答えて席を立った。そこでふと気付く。何故か陵はクラスメイトに取り囲まれるような格好になっていた。

「なっ、なんだ？ おまえら」

「あたしが受付するから、綾は座って……ってここじゃまずいかも」

いつの間にか傍に立っていた結衣が首を傾げてみせる。一体、何事だろう。陵は訳が判らず、周囲にたかっているクラスメイトを見やった。洋子の傍にいた美矢が当たり前のような口ぶりと言う。

「洋子先輩。検査の会場、どこにします？」

「特別保健室、まあ、実際には工作室なんだけど、そこですればいいかな？ みゃー。受付はあなたがやって。結衣ちゃんは、綾ちゃんの助手しなきゃいけないから」

そう答えた洋子が視線を動かす。いえっさ

一、と元気に返事した美矢が敬礼をしてから教室を駆け出していく。陵は何度か瞬きをしてから結衣を見やった。

「な、なにごと？」

「えっと、綾、もしかして、居眠りとかしてた？」

ちょこんと首を傾げた結衣に問われ、陵は返事に詰まった。教室から出て行った美矢がすぐに戻ってきて洋子に何かを差し出す。

「はい、特別保健室の鍵です。じゃ、受付はこちらでしますので、皆さん並んでくださーい」

美矢がそう声を掛けて教室の入り口に机を寄せて腰掛ける。すると陵を取り囲んでいたクラスメイトたちは一列になって美矢の前に並び始めた。

「寝てはいなかったんだけど、ちょっと考え事してて」

結衣に促されて歩きながら陵は小声で言った。陵と結衣を追い越した洋子が教室の隣の部屋の前で立ち止まって手招きをする。

「とりあえず、こっち、いらっしゃーい」

陵は結衣と共に洋子のところに向かった。洋子が鍵を開けてドアを開く。陵は部屋の中を覗いて眉を寄せた。

「なに？ メンテ台？」

小さい部屋には見慣れたメンテナンス用の台が一台、置かれていた。壁際に置かれた棚には工具などが入っている。

「とりあえず、綾ちゃんには、このクラスの担当修理技師やってもらうことになったから。結衣ちゃんは助手ね」

「あ、そういうことか」

洋子の言葉に頷いてから陵はメンテナンス

台の傍の椅子に腰掛けた。何かトラブルが発生した時に、機体の構造を把握していないと対処に手間取る可能性がある。担当修理技師を務めるとなると、あらかじめ、クラスメイト全員の構造を把握しておく必要があるのだ。

メンテナンス台は陵がいつも使っているものと同じタイプだ。これなら説明して貰わなくても使える。陵は手早く台の高さを最低にしてから結衣に目をやった。メンテナンス台の横には作業用の台が置いてある。

「工具出しておいて」

「はい」

頷いた結衣が準備をし始める。陵は今度は洋子に目をやった。

「白衣ある？」

「ここかな？」

そう言いながら洋子が棚の横のロッカーを

開く。そこにあった白衣を手渡され、陵はそれを手早く着込んだ。

「洋子先輩はどうするんだ？」

洋子の機体構造は既に熟知しているので今さら確認する必要はない。メンテナンスも昨日の深夜に済ませたばかりだ。洋子が胸を張ってきっぱりと言い切る。

「生徒会長として責任を持って作業を監督させてもらうわ」

「……要するに、見たいってことだな？」

機体構造を確認するとなれば、裸に剥く必要がある。洋子としては合法的にクラスメイトのあられもない姿を見る絶好のチャンスというわけだ。

「あ、あの！ わたくしも見学していいですか！」

おずおずと手を上げつつも、里香子がはっ

きりと希望を述べる。動機は洋子と同じだろうが深くは追求しなかった。判った判った、と手を振って陵は二人に了解の意を示してみせた。

そうしている間に、クラスメイトの一人がおずおずとした様子で入ってくる。

「あの、これ……」

恥ずかしそうに顔を赤らめたクラスメイトが小さなメモリカードを差し出す。どうやら受付をしている美矢が簡単な機体データをまとめてくれているらしい。カルテのようなものね、という洋子の話に頷いてから、陵はメモリカードを結衣に手渡した。

「頼むね」

「うん」

にっこりと笑った結衣がメモリカードをつまんだ手をスカートの中に入れる。陵はクラスメイトを台に乗るように促してから、結衣

を見た。

「構造を把握すればいいのかな？」

「とりあえず、今日はそれでいいと思うけど。洋子先輩、もし故障してたりしたらどうすればいいですか？」

結衣がクラスメイトが横たわった台を少しずつ高くして、陵が作業しやすい位置に調整しつつ、洋子に訊ねる。すると少し間を置いてから洋子が返答する。

「そういう故障をしてる子は今はいないと思うけど、綾ちゃんがすぐ対処できる範囲なら直してあげて、もし酷く壊れてたら、メーカーに問い合わせさせて対応してもらって。今日は、それぞれの子の構造の確認だけじゃなく、整備状態の確認もして。いい加減な整備を受けている子や、へんな故障癖とかある子もいるから」

「りょーかい」

洋子の言ったことに頷いてから、陵は台に

横たわる生徒のスカートをめくりあげた。結衣が横から手を伸ばして穿いていたショーツを引き下げる。

結衣の情報によれば、今診ているクラスメイトは三年生だという。確認作業を始めた途端にそのクラスメイトが昂奮しだしたのを見て取り、陵は電源を切るように指示した。指示に従って結衣がメンテナンス台に横たわるクラスメイトの電源を切る。今にも喘ぎそうになっていたクラスメイトがぴたりと動きを止める。それを確認してから、陵は作業を再開した。

まずは、股間部分をチェックする。このクラスメイトの機体は安価なタイプらしく股間は作り物っぽい。洋子や結衣のように機械的では無いが、形状はデフォルメされており、質感も安っぽかった。

「ここは新品みたいね。こすとを下げてもまめに交換するタイプなのかも」

「なるほど。それはそれで合理的だな」

新品なら問題は無いだろうと、点検用のハッチを探すことにした。結衣がブラウスを脱がせ、人工皮膚の継ぎ目を確認する。どうやら脇腹から腹部の人工皮膚を大きく取り外せるタイプらしい。しかし、腹部の蓋を開こうとするがなかなか開かない。脇腹の人工皮膚の継ぎ目あたりに設えられたスライドスイッチがおかしいのだ。

理由は苦心して蓋を開いてみて判った。

「なんだ！ このバリのたってる部品は！
おいこら、この基板のハンダ付け超いい加減だぞ！ クラック入ってるところもあるし！
このヒューマノイドを作ったのは誰だ！」

台の上に横になったクラスメイトの腹部を覗き込みながら、陵は怒りに目を吊り上げた。腹部がなかなか開かなかったのは、樹脂製のスライドスイッチの部品の作りが適当で、スイッチのスライドを妨げるような引っかかりがあったためらしい。問題の部品を取り外し

て結衣の方に手のひらを出す。すると結衣が素早く陵の手にヤスリを乗せた。

「この機体は木村精工製よ」

「ちょっと待て。木村精工って木之下の機体を作ったところだったよな？ 俺の好みには合わないけど木之下の機体は凄い出来が良くて、こんな不良品を作るようには思えない」

問題の部品を分解しながら陵は眉間に深いしわを刻んだ。すると結衣がため息混じりに意見をくれる。

「企業なんだから、部署とかいろいろあって、この部署が作ったヒューマノイドは凄いけど、別の部署のはだめ、とかあるのかも？」

「むう、でも俺は納得出来ないな」

結衣の言うことに言い返ししながら、陵は猛烈な勢いで目の細かいヤスリで樹脂製のスライドスイッチの部品を整形した。ヤスリを結衣に戻してから、元々ささっていた場所に部品を嵌め込み、続いて電子回路を外してハン

ダ付けの甘い場所やクラックの入った部分を直す。

「よし、完了！」

「再起動の作業は私にまかせて！」

洋子が嬉々としてクラスメイトのヒューマノイドを抱き上げるとカーテンで仕切られたベッドの方へ連れていく。里香子もついていくかと思ったら、結衣と真剣な表情でヒューマノイドの整備についての話をしている。どうやら里香子はゆりゆりな目的で見学を申し出たのではなく、純粹にヒューマノイドの整備について知りたかったようだ。

「次！」

一人目のクラスメイトを洋子に任せ、陵は鋭い声をドアに向かって投げかけた。ドアの入り口のところでたむろしていた数人の中から一人が歩み寄ってくる。

今度のクラスメイトはさっきの生徒のよう

にあからさまに欲情したりはしなかった。結衣の質問にきちんと返答を返している。股間部分を観察し、点検ハッチの位置を聞いて開いてみたが何の問題もない。

「このヒューマノイドはK T S製か」

「さすがに、しっかりした作りね」

K T Sはヒューマノイドの派遣というかりーす業などを行なっているが、技術部門の能力は高いとの評判だ。噂に違わずしっかりした作りのようだ。一通りのチェックを済ませた後、陵は結衣にOKのサインを出した。結衣に促されたクラスメイトがメンテナンス台を降りる。

「次！」

陵が鋭い声を飛ばすと、今度は裸のクラスメイトが一人、恥ずかしそうに歩いてくる。その傍には嬉々としてクラスメイトたちの服を剥ぐ洋子の姿があった。確かに脱がせておいた方が効率はいいのだが、裸で立たされて

いる間に昂奮してしまう生徒もいるのではないだろうか。そんな陵の心配を余所に、洋子は次々とクラスメイトの服を剥いていく。

全ての作業が終了した時には夕方になっていた。陵はぐったりとしながら立ち上がり、白衣をのろのろと脱いだ。

「大半は駄目だな。K T S か梓さんに管理されてる機体以外は、ちゃんとメンテしてもらっている様子がない」

「外観はともかく、中がどうなってるかまでは考えてないのかも……」

結衣が少し困ったような顔をしつつ、白衣を脱ぐ。今日一日で二人の着ていた白衣は潤滑液やオイルなどで汚れてしまっていた。

「まあ、そんなに難しく考えなくても……。動きゃいいのよ。動けば」

クラスメイトたちのあられもない姿を堪能して満足したのか、嬉しそうな顔で洋子が頷

く。陵はちらりと洋子を見てから、いや、それはどうかと思うぞ、と反論した。

「自分の事なんだから、もっと関心を持つべきだと思うんだけどな。これだけの人数がいて、ヒューマノイドで技師を志望しているのが、結衣だけっていうのは問題じゃないか？」

陵のつぶやきを聞いて里香子が思案するような顔をしていた。結衣はそのことに気付いたようだが、考えこんでいた陵は里香子の反応には全く気付かなかった。

陵は使った工具を片付けて結衣と洋子、そして里香子と共に工作室を出た。そこで里香子が先に用事があるとのことで立ち去り、三人が廊下に残ったところで、陵は背後に気配を感じて慌てて振り返った。

どうやら里香子がいなくなるのを見計らっていたようだ。ソニアが陵の後ろに立っている。そわそわと視線を彷徨わせながら、ソニアが小声で言う。

「あの……。できれば、あたくしもお願いしたいのですが……」

「は？ あ、もしかして先生もヒューマノイドなのか？」

陵の問いかけにソニアが恥ずかしそうな表情をして頷く。陵は洋子に言ってもう一度工作室の鍵を開けてもらった。開いたドアから再び工作室に入り、奥にある椅子に腰掛ける。

「せんせっ！ 観念して脱ぎなさいっ！ 生徒会長命令よっ！」

「市ノ瀬さんっ！ だめっ！」

ドアの入り口のところで洋子とソニアが揉み合いを始める。陵は洗濯しようと思っていた白衣を再び着込んだ。

～立ち読み版はここまでです～